

# 沼津市若山牧水記念館

第18號

1997. 3. 20

編集・発行 社団法人 沼津牧水会  
〒410 沼津市千本郷林1907-11

TEL (0559) 62-0424  
FAX (0559) 62-0424

若山牧水の初期の作品

## 行き暮れて尋ねぬものを時鳥 悲しき初音今ぞ聞くなる



若山牧水が最初に

発表した作品として知られているのは、延岡中学の「校友会雑誌」第一号（明治三十四年一月二十五日発行）に載った短歌三首であった。

その号には、他に俳句二句と「雷雨」という短文を寄せているが、この時牧水は延岡中学二年生、満十五歳、多感な文学青年の誕生期である。

う。もう一人、この当時牧水に大きな影響を与えた人に英語教師の柳田友麿がいた。明治三十六年九月の日記に「柳田師の英語に、晶子の歌二つを英訳せよと言はるる面白し」とあるが、柳田は英語の他に国語、漢文をよくし、白楽天の詩を朗詠したりする教師で、牧水の詩才を認め、文学に専念することを薦めた早稲田進学の援護者でもある。さらに、牧水の文学志向を助けたのが、牧水の従兄で七歳年上の若山峻一（氷花）である。ある日峻一が牧水の下宿先に尋ねて来て、「明星」やその他の新しい歌壇の動向を話し、宮崎の『日州独立新聞』の存在も教えてくれた。牧水の下宿先は文学の友大見達也の家で、氏は同級生とはいえ牧水より四歳年上の桂風と号する文学青年であった。必然的に牧水の周辺には文学を志す青年が集まって、回覧雑誌や短歌誌の発行などに情熱を燃やしたのである。投稿という行動を教えられたのもその頃であった。

冒頭に掲げた一首は明治三十四年八月発行の『中學文壇』に載った作品で、佐佐木信綱選の入選歌であり、「若山桂露」の名で投稿された。『中學文壇』『秀才文壇』などへ、本名「繁」のほか「雨山」「白雨」「野百合」というような雅号で盛んに投稿している。

明治三十五年八月より翌年八月までの一年間に『日州独立新聞』に掲載された歌は約二百首、同好の友人たちを瞠目させたその成果は大きな自信になったことであろう。作品のいくつかを紹介したい。海にあびて帰る松原末遠く青葉若葉に白雨のふる

（明治三十五年八月十二日号）

清水湧く山路なかばの松かげに荷馬車の旗のひるがへる見ゆ

（同年八月十二日号）

朝餉たく水汲み居れば野の谷に野ゆりの花のほろほるとちる

（同年八月十七日号）

幾むれか花野をよぎる絵日傘に日かげうららの秋まつりかな

（同年九月四日号）

売らるべく市にひかる馬の子の今日の嘶きなどかくひくき

（同年十月二十四日号）

（須永 秀生）

梅の花今や咲くらむ我庵の柴の戸あたり鶯の鳴く（早春懷梅）  
身に纏ふ綾や錦はちりひぢや蓮の葉の上の露も玉哉

（奢美をいましむ）

かくれたる徳を行ひ頭れぬ人は深山の桜なりけり（陰徳家）

特に三首目の「かくれたる」の作品は、中学の校長の山崎庚午太郎に大変褒められたと聞く。山崎校長は新進気鋭の高邁な理想と熱烈な意気の人で、史学専攻の人だったが文学への理解も深く、西行や香川景樹を語る人だった。牧水はいたくこの校長に心酔したと言

# 若山牧水歌碑インデックス

榎本 尚美

(元国立相模原病院副院長・医学博士)



「かたは

らに秋ぐさの花かたるらくほろびしものななつかしきかな」の碑を

その城の石垣に見た時は驚きと同時に懐かしい小父さんに会った心地で興奮し

現在の高校の教科書等には牧水の歌がよく引用されているが、私共の中学の頃は戦争中で、質実剛健を旨とした忠君愛国の教育を施され、短歌等も驕奢華美に流れるものは排され、岩波文庫の佐佐木信綱編の「萬葉集」などを読むことが多かった。

しかし、母が喜志子夫人の門人であったこともあり、子供の頃から牧水の歌に親しんでいた。「かたはらに……」の歌碑を見つけた時の興奮が今回想版した『若山牧水歌碑インデックス』の源となった。

その後、喜志子の孫の篁子との結婚が決まって、若山家の下車駅中央線立川駅北口にある第一三基目の歌碑の「立川の駅の新茶屋桜樹のみぢのかけに見送りし子よ」を眺めたり、三浦海岸に昭和二八年に建てられた第一五基目の歌碑「しら鳥はかなしからずや空の青海のあをに染まずただよふ」と裏面の喜志子詠「うちけぶり鋸山も浮び来とけふのみち潮ふくらみ寄する」へデートしたりで、碑との縁も深くなっていった。

新婚旅行は、念願だった牧水の『みなかみ紀行』の足跡を逆に辿り、群馬県の沢渡温泉から暮坂峠を越えて草津へ歩いた。前の年に篁子が除幕した第二〇基目の「枯野の旅」の詩碑は、昭和三年当時、幅が一mくらいの急峻な峠道にあったので、徒歩の他に訪れる方法はなかったのである。

同時に、長野県立科の蓼科牧場に牧水詠の「見よ

旅人秋も未なる山々のいただき白く雪つもり来ぬ」と喜志子詠「ふくらかの立科山のたち姿佐久の花野に裾曳きのべて」の歌碑の除幕式があり、本来は喜志子臨席のもとに行われることになっていたが、喜志子の体調の関係で急遽私共が代わって式に参列した。その年は牧水没後三〇年に当り、三〇年間に建立された歌碑は二一基であった。

その後、没後五〇年(昭和五三年)や生誕百年(昭和六〇年)を記念して、或いは「ふるさと創生事業」などにより牧水歌碑は全国各地に建立された。

爾来、麻酔学会等で出張する度にその地の牧水歌碑を見るように心掛けたが、案内書も無かったので訪ね歩くのも思うに任せなかつたのである。

昭和五九年四月、牧水門下の大悟法利雄氏が『牧水歌碑めぐり』を著し、全国九六か所の歌碑の解説をされた。これでファンの歌碑探訪のしるべができて愛読された。

牧水歌碑はそれから次々に建立され、生誕百年の平成四年には一五七基となった。その年、牧水生誕の地宮崎県東郷町では全国牧水歌碑所在市町村関係者による第一回牧水サミットを開催したが、その際渡邊邦彦教育長が中心となって編集した『若山牧水全国歌碑集』という立派な写真帖が東郷町から刊行された。しかし、その後も各位の御好意で全国に牧水歌碑が建立され、その数は益々増えて行き整理

た。それは昭和二四年、友人を訪ねて信州を旅した途次、小諸の懐古園には島崎藤村の有名な「千曲川旅情の歌(小諸なる古城のほとり……)」の碑があるときいて立ち寄ったときのこと、それが私が若山牧水の歌碑に接した最初であった。

この碑は昭和九年一月に建てられたものだが、沼津市千本浜に昭和四年に第一基目として建立された「幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく」に次ぐもので、全国に牧水歌碑が九基しかなかった当時としては大変珍しかったわけである。

がつかなくなりつつあった。どのくらいの数になつたかと素朴な疑問を持ったのが、この調査研究の糸口であつた。

調査は、今まで歌碑を見て記録しておいたものや牧水の長男旅人の話、牧水関係の文献などをコンピュータのデータベースソフトに入力し、これを建立順、五十音順、都道府県別建立順に一覧表を作製し、併せてこれらの解析を行った。

その一部を記すと次のようになる。

牧水の歌碑は日本全国に一八三基、詩碑は一基、文学碑は六基、碑の合計は一九〇基である。

その碑は、東日本の一四県と西日本の一五県、全国の約六割にあたる二九都道県に分布している。

県別で多い所は、宮崎県（牧水生誕の地）の五〇基、長野県（妻喜志子の出身地）の二六基、静岡県（牧水終焉の地）の二四基、よく旅した群馬県の二一基などである。

一つの歌碑に複数の歌が刻されたものもあるので、一八三基の碑に全部で二一八首の歌ということになる。

その中でも一番多いのが「幾山河こえさりゆかば……」で全国に一〇か所、次に多いのが「うす紅に葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山ざくら花」の六か所である。また「わか竹の伸びゆくごとく子供等よ真すぐにのばせ身をたましひを」の教訓的な歌碑が五か所にある。

このようにして牧水の詠んだ約九千首の歌のうち一七四首が歌碑として遺されている。

さくら・燕・富士といえは戦前の国鉄の三つの特急列車であるが、桜・酒・富士といえは勿論連想されるのは牧水である。

歌碑に刻された桜をテーマにした歌は一七基、二一首ある。

牧水というと「白珠の歯にしみとほる秋の夜の酒はしずかに飲むべかりけり」などによって酒を思い出す人が多いようだ。「酒を飲まずにきちんとしていることは誰にも出来ることだが、酒を飲んで益々きちんとして居るのは中々出来ないことだ。これを酒仙というのだ」と牧水は述べているが、酒を心と体の糧として端座して静かに飲んでいた。彼は酒聖ともいわれたが、酒に関する歌碑は一八基、二一首ある。やはり、酒に共感する人がこの世には多いのであろう。

因みに「白珠の歯にしみとほる……」の歌碑は全国に四基ある。

富士をテーマにしたものは七基、七首あるが、これはすべて沼津市、裾野市、伊豆半島など富士山の見えるところに建立されている。

牧水は、自分の雅号に母「まき」の名をとつたくらい母を大事に思い懐かしんでいたのだが、母を詠んだ歌碑は八基、八首見られる。

なお、歌碑については牧水の他に妻の喜志子（二六基、二七首）と長男で沼津市若山牧水記念館館長の旅人（七基、七首）についても併せて調査した。

統計が出来、検索の結果も纏まり、歌碑のエピソードも調べてみると、そのまま埋もらせるのも惜しいとの周囲の声もあり、また牧水の研究、或いは歌碑を探訪したいという方にも読んで頂きたいと、書名も「若山牧水歌碑インデックス」として昨年の十月に上梓した。

ところで外国には歌碑があるのだろうか？ 中国では江蘇省蘇州の寒山寺にある唐代の詩人張継のよ

んだ七言絶句「楓橋夜泊（月落ち烏啼きて霜天に満つ……姑蘇城外の寒山寺、夜半の鐘声客船に到る）」の石碑が有名で「どうして鳥が夜中に鳴かなければいけないのだろうか？」などと疑問を持つ人がいると聞いたこともある。

一方、欧州では戦争等の記念碑とか、道路脇に作られる一里塚（milestone）とか、環状列石（stonehenge）（stonehenge）とか、バイキングの碑のようなものはよく見掛けるが、歌や詩を刻んだ石碑というのは見当たらないようである。私は国立病院に在職中、WHO（世界保健機構）の麻酔学研修で一年間ヨーロッパに留学したことがあつたが、その折も歌や詩を刻んだ碑は見つけられなかつた。

欧米には短歌や俳句がないから、句・歌碑は無いのだと言つたら身も蓋もなくなる。

我が国に於いては句碑は芭蕉ものが各地に見られるが、歌碑としては牧水のものが一番多いようである。やはり、各地を旅しながら人々に親しみやすい歌を作つた強みであろうか。



若山旅人氏 旅人氏長女 榎本篁子氏 榎本尚美氏

牧水の存命中は彼の碑は一つもなかった。沼津に転居後、周りで歌碑建立の話が持ち上がると「そのような晴れがましいことは……」と固辞したというところが没後一年にして早くも沼津市千本浜に重さが一五トンもある自然石で最初の歌碑が建立され、それから六七年の間に一九〇基になったのであった。牧水の歌が如何に現代人の心の琴線に触れ、読む人の心を打つ何物かを持っているかを物語るものであろう。

牧水の歌碑に惹かれて調査した結果がこのようになったのであるが、興味を持つ方のお役に立てば幸いと思っている。

もし人を文科系と理科系に分けるとすると、私はその後者に属し、論文等は横に書くことに慣れている。短歌などの文学的のものを縦書きにしないのを快く思わない方には御勘弁願うとして横書きで出版したが、幸いなことに抵抗を覚えるという御意見は今までに何っていない。

なお、この本の原稿が完成したのは牧水生誕一一年目の平成八年八月八日であった。図らずも牧水が雑用紙に落書きした「八が嶽峰のとがりの八つにさけてあらはに立てる八つが嶽の山」という八の重なる歌を見つけたので、数字合せではないがこれも何かの因縁かと本書の表紙カバーに印刷した。

『若山牧水歌碑インデックス』は一般の書店では販売していない。

静岡県沼津市千本郷林の沼津市若山牧水記念館と生誕の地宮崎県東白杵郡東郷町坪谷の牧水記念館に用意してある。

念のために記すと、定価は二五〇〇円、送料は三〇円である。

## 第一回若山牧水賞に高野公彦氏



高野公彦氏と第1回若山牧水賞の盾とトロフィー

牧水の生誕百年を記念し、宮崎県、同県教育委員会、延岡市、東郷町、宮崎日日新聞社の共催により、歌集及び牧水に関する評論で傑出した功績を上げた歌人等に贈られる「若山牧水賞」(副賞百万円)が創設され、その第一回受賞者に高野公彦氏(青山学院女子短大教授)が決定した。作品は、歌集『天泣』(短歌研究社刊 定価二九〇〇円)である。

高野氏は昭和十六年愛媛県生れ。東京教育大卒。学生時代に啄木を読み、作歌を始める。やがてコスモス短歌会に入会、宮柵二氏に師事。五十一年コスモス賞、五十七年短歌研究賞受賞。コスモス選者、

同人誌『棧橋』編集人のほか平成五年から日経歌壇選者、平成六年から現職。歌集に『汽水の光』『水木』『淡青』『雨月』『水行』『地中銀河』『般若心経歌篇』、評論集に『地球時計の瞑想』『うたの前線』。

受賞作の歌集名『天泣』は「雲がないのに雨または雪の降る現象」のことで、この気象用語を歌集の名に選んだ背景について、選考委員の一人で歌人の伊藤一彦氏は「人間によって自然が泣かされている。そしてまた、相も変わらぬ人間社会のもろもろの愚行を自然は泣いているという気持ちがあるからに違いない。」と言い、「牧水にとつてもそうであったように、高野さんにとつて人間も宇宙の中の、自然の中の一存在である。高野さんはまことに優れた身体感覚の歌を作る人であるが、それは身体を自然そのものとして捉える視点から生まれている。『天泣』中の老いの歌も性の歌も、自然を歌った作品として読むことができるし、そこに大きな魅力がある。」と講評している。

『天泣』から数首を紹介する。  
天泣のひかる昼すぎ公園にベビーカーひとつ  
ありて人あらず

滝、三日月、吊り橋、女体、うばたまの闇に  
しづかに身をそらすもの

我を生みし母の骨片冷えをらむとほき一墓下  
一壺中にて

杖つきて歩く日が来む　そして杖の要らぬ日  
が来む　君も彼も我も